

相模湾産クシクラゲ類の形態分類に基づいた多様性研究

○梅津弥子（北里大学、JAMSTEC）、Dhugal, J. Lindsay（JAMSTEC）

有人調査船や無人探査機による調査の普及により、従来のプランクトン採集手法による標本では観察困難だった深海性ゼラチン質プランクトンが観察され、その多様性が明らかになってきている。これと同時に、中・深層を漂うクラゲ類に寄生する端脚類、魚類に補食されるサルパ類など、ゼラチン質プランクトンと他の動物群との関わりが報告されている。これらのことから、ゼラチン質プランクトンは、中・深層における生物間相互作用を議論する上で、重要な役割を担っている動物群であると考えられ、近年ではその多様性に関する調査が行われている。

クラゲと称される動物群は、刺胞動物門と有櫛動物門（クシクラゲ類）の2つの大きな分類群を含んでおり、我々は、それらに着目して調査を進めて来た。中でも、有櫛動物門に属するクラゲは、極めて脆弱であるために、有人潜水調査船及び無人探査機による映像情報によってその存在が明らかになるケースが多い。現在知られている、クシクラゲ類の殆どが、1900年代初頭に記載されたものであるが、近年行われている無人探査機を用いた調査では、1900年代に報告されてきたものとは異なった形態形質を持つものが数種報告されている。これにより従来のクシクラゲ類の形態分類体系の見直しを行う必要性が高まっている。分類体系の見直しや整理を行うことは、単なる分類学研究に留まらず、より正確な多様性の評価や群集構造の解明を行う上で重要な行程であり、それに基づいて調査を行わなければならない。

本研究では、中・深層における有櫛動物門の多様性研究及び群集構造の解明に先立ち、形態学的特徴で見た場合、一つの海域に、どれほど多様なクシクラゲ類が存在しているのかを明らかにするための調査を行った。モデル海域及び調査モデルとして、北緯 35° 00.0'、東経 139° 13.7' 地点で、2006年2月27日から3月7日までの期間で昼と夜に行われた‘Hyper-Dolphin’（ROV）の計5潜航の映像データを基に、出現した有櫛動物門の同定を行い、結果として19種のクシクラゲ類を観察した。観察された19種に対し、相模湾産クシクラゲ類として、形態学的特徴についてまとめ、新たに映像情報から得られた行動及び生態学的な記述を加えた。さらに、生態学的な記述部分では、より詳細な分布情報を示すため、‘Hyper-Dolphin’に搭載されたCTDデータから得られた塩分濃度、水温及び溶存酸素のデータを加え、各深度帯における有櫛動物の出現傾向を考察した。